

そーふれぽっ!!

才琴温泉のヤベー女編

作者・最上拓哉(さいじょうたくや)

今の俺は、草食動物を狙う肉食動物のよう。そう、言うなれば野獣の眼光をしている。風俗情報掲載サイトで今回の主戦場「雄琴」のソープランド一覧を眺めていた。ふと、目についた店をクリックする。「セクレタリー雄琴店」だ。社長秘書をコンセプトとし、客を社長、嬢を秘書としてプレイを楽しむと言ったものらしい。在籍嬢を一通り見てみる。悪くない、ここにしようではないか。我ながら不敵な笑みを浮かべていたと思う。店が決まったところで次は嬢選びといこう。まずは来店予定日に出勤する嬢を確認する。14名か。

では、——参ろうか。

まずはパネル確認。美人系か可愛い系か、俺は可愛い系を選ぶ。美人系は意外と気が強い方が多い(経験談)。次に公開されているスリーサイズをみる。ウエスト60cm以下なんて数字を間に受けるのはよろしくない。女性のウエストの平均サイズは一般的に65~70cmと言われている。モデルですら57~62cmとされている。だというのに、ウエスト57cm以下の方がたくさん在籍しているのはおかしい話だとは思わんかね？だが、捨て置くにはまだ早い。その店の在籍嬢のウエストの中央値を求める。あとはウエストが中央値以下の嬢を選べば大丈夫だろう。

まあ他にもみるべき点は色々あるが割愛させていただく。以上の点を考慮した上で俺が選んだのは「七瀬ユノ」。黒髪ショートの可愛い系で身長155cmのスレンダー系だ。おっぱいは小さいが些事に過ぎない。さあ、当日まで待ち切れないな。

受付で「予約した田所(偽名)なんですけど」と伝え待合室に案内される。案内室への道すがら、ボーイに手の爪を確認され「待合室に爪切りがあるんで切っておいてくださいね」と言われる。嘘だろ...？これ以上切ると深爪になってしまうんだが？まあいいさ、嬢の柔肌を傷つけるわけにはいかないからな。俺ってば紳士だぜ。

待合室で待つこと5分程度、カーテンが開かれボーイが登場する。

「お待たせしました。時間の限りお楽しみくださいませ」

ボーイの手の先にはスカートタイプのリクルートスーツを着た、言うなれば秘書の格好をした女性が立っていた。黒髪ショートで顔は少し地雷系を思わせるメイク。顔も整っていて可愛い。パネマジ回避ッ！大当たりじゃあねえか！

「七瀬ユノです。よろしく」

うわっは。想像よりダウンナーな感じでたまんね。俺キャピキャピ系よりダウンナー系の方が好きなんだよね。七瀬ユノと手を繋ぎ階段を登っていく。

「お兄さん何歳？」

「23だよ」

「23かぁ。じゃあ私と一緒にだね」

プロフィールでは20歳と書いてあったが実際は23だ。まあプロフ詐欺なんてものは風俗では当たり前だ。あんなものを間に受けていたら、死ぬぞ？新兵？などと思いつながら階段を登り個室へ案内される。部屋の扉が開くとベッドルームとバスルームが仕切りも無しに繋がっておりバスルームの壁にはバルーンタイプのマットが立てかけてある。

「今日は何回戦までする？」

今回俺が指定したのは80分コース。普通であれば60分で一回戦の人がほとんどであろう。だが俺は早漏なんぞ。そこから導き出される結論は。

「3回戦までは行きたいかな」

「本気で言ってる？」

「大マジ」

俺は自信満々で返す。

「きも」

ソープ嬢にきもって言われてこれ(任意の泣いてる画像)。

「じゃあ頑張らないとだね」

そうやって七瀬ユノはジャケットを脱ぎワイシャツのボタンを外していく。

「どうしたの？身体洗いに行こ？」

「ああ、ごめん」

俺も服を脱ぎカゴに入れていく。ふと、七瀬ユノの方に目をやると、両腕に、手首から腕にかけて横向きの白い線がびっしりと入っていた。あ、やばい。死んだ。今日俺は、七瀬ユノの地雷に触れて頸動脈搔っ切られて死ぬんだ。きつとそうだ。戦々恐々となりながら全裸になり七瀬ユノが服を脱ぎ終わるのを待つ。そんな状況にも関わらず俺のムスコはフル勃起していた。身体は正直ですやんっ！

「お風呂行こ？足元すべるから気をつけてね」

七瀬ユノに手を引かれてバスルームへ移動する。床が少し濡れている。先客が終わった後に洗い流したのだろう。

「めっちゃガチガチじゃん。何？そんなに私とえっちしたかった？」

急に耳元で囁かれてチンピクしてしまう。なっ、ナメやがってこの女~~~~。俺は効いていませんアピールをするために平常心で返す。

「ああ、楽しみにしてた。今日は心ゆくまで愛し合おう」

「きも」

ソープ嬢にきもって言われてこれ(任意の泣いてる画像2枚目)。そんなこんなで歩いていくと真ん中が空いた椅子、通称「すけべ椅子」に座らされる。蛇口を捻りシャワーヘッドに手を当てる。湯加減を確認しているようだ。シャワーヘッドがこちらに向けられ太ももお湯がかかる。

「温度は大丈夫そ？」

「ちょうどいいよ」

「おけー」

このゆるい感じが好きなんだよな。胴体、手、足、チンポ、ケツの穴などを一通りお湯で洗い流すと蛇口を止める。今度は洗面器にお湯とボディソープを入れ泡立てる。出来上がった泡を俺の身体につけ擦る。胸を、腹を、脇を、太ももを、脛を、腕を。手を洗う際は恋人繋ぎで隙間を洗ってくる。

「普通の子とこうやって繋いだことないでしょ」

ちよっとお？この子失礼すぎません？俺じゃなかったらキレてるところだったよ全く。てか、普通の子と恋人繋ぎくらい…無いな、風俗の子としかないな、うん。

「ちよっと失礼」

急に抱きつかれてドキッとしたが普通に背中を洗うから近づいただけだった。背中を洗い終わるといよいよ股間で元気にしているチンポの手が伸びる。

「形もいいし硬さもガチガチ、初めて見るレベルかも」

フン、俺の扱い方をわかってるじゃあないか。男は自分のチンポを褒められると自尊心が高まるんだよ。

「まあ大きさは元カレが一番だけど」

おい。その一言は余計だろ。七瀬ユノは俺のチンポの亀頭に触れる。触れられた快感に思わずチンピクしてしまう。

「へえゝ敏感なんだゝ可愛いゝ」

そう言って七瀬ユノはオデのチンポをこねくり回す。

「んっ、可愛くないんですけどっ」

なんかくっ殺女騎士みたいになっちゃったけど俺男なんだよね。七瀬ユノは俺の左耳の近くで囁いてきた。

「正直に言いなよ、「僕はクソ雑魚早漏チンポマンです」って」

俺のチンポを翻弄する七瀬ユノの手が加速する。

「僕はクソ雑魚早漏チンポマンです」

秒殺だった。無闇に抵抗していればあのまま射精していただろう。

「はい、よくできました」

俺のチンポを苛烈に攻めていた手は猛攻を止め俺のケツの穴を泡で洗う。数秒でケツ穴を洗い終え蛇口を捻りシャワーで俺の身体についた泡を洗い流していく。七瀬ユノは先ほどのボディソープとは別のボトルから透明の液体を出し俺のチンポとケツの穴に塗っていく。

「ん？これ？グリンスって言ってね、この業界だと「殺菌薬用ボディソープ」って言うてるの。これを性病持つてる人のチンコとかお尻の穴に塗ると傷口に染みて痛がるんだって」

「はえーそうなんすね」

なるほど、つまり特に痛みが発生していない俺は合格ということでもいいのかな。そんなことをおもっているとすでにシャワーで洗い流されていた。

「先湯船浸かってー。私も後で入るから」

七瀬ユノにそう言われたので湯が張られた浴槽に入りのんびりとくつろぐ。

「はい」

そう言って七瀬ユノに歯磨き粉が乗った歯ブラシを手渡される。

「ん、あざす」

俺は手渡された歯ブラシを用いもくもくと歯磨きをする。他の風俗ではどうかかわらないがソーランドでは歯磨きをすることがほとんどだ。キスをする際に口臭が臭ってき

たら嫌だからな。七瀬ユノの方を見てみると身体を洗いながら歯磨きをしている。器用なもんだな。

「今日はどこから来たの？」

「いへへん」

「何て？」

流石に歯磨きしながらだと上手く喋れない。歯ブラシを動かす手を一旦止める。

「三重県」

「三重県ってどこ？」

「滋賀県の右隣だよ」

俺の住んでいたところから雄琴温泉までは車で高速道路を使って1時間ちよつとかかる。

「へー」

へーで流されちゃったよ、まあいいけど。

「はい、その排水溝にべーして」

今度はお湯の入ったコップを手渡される。このお湯でお口くちゅくちゅしてべーしたらはみがきできたーなんだね(語彙力低下)。

「あざます」

お湯を口に含み口内の歯磨き粉を落とす。そして廃液を排水溝へと噴射する。まだ歯磨き粉が取れていない感触があるのもう一度湯を含み吐き出す。うん、すっきりした。

「お湯はまだ残ってる？」

「いや、あんま残ってない」

「おけー」

七瀬ユノはシャワーで俺のコップに湯を注ぎ足しイソジンも追加で入れる。

「はいこれ飲んでね」

「いやうがいでしょうが」

俺と七瀬ユノは同時にイソジン入りの湯を口に含みうがいする。同じタイミングで排水溝に吐き出す。

「実際イソジン飲んだらどうなるのかな」

七瀬ユノに手を差し伸べられたので空のコップを渡す。

「お腹壊すんじゃないの、知らんけど」

七瀬ユノはシャワーで軽くコップを洗いバスルームの石棚に置く。

「私も入るから足開いてー」

俺は浴槽内で足を開くとその間に七瀬ユノが入り俺に背を向けて座ってくる。俺のチンポが七瀬ユノの尻と俺の身体に挟まれる。七瀬ユノに手を掴まれ両手で七瀬ユノのお腹を抱きしめるように動かされる。

「どう？結構細いでしょ？」

今までの子(全員風俗嬢)と比べても細い方だ。それでいて細すぎずちょうどいい塩梅。

「いいね。運動とか頑張ってるの？」

「や、食事制限」

「へー」

七瀬ユノは身体を小さく左右に揺らしながら何らかのリズムを取っている。

「あづ、あがる」

早くない？あなたまだ入って十秒ぐらいしか経ってないよ。しかもこのお湯そこまで熱くないよ。

「どうする？あがる？」

かくいう俺も十分温まったし、あがるとしましうかね。

「あがるよー」

「あつ、ちよつとまってねー」

七瀬ユノはバスタオルを三枚ほど用意し一枚をベッドルームの入り口に、もう二枚をそれぞれ七瀬ユノと俺の身体を拭くようにしている。七瀬ユノは手早く自分の身体を拭くところらに呼びかける。

「来ていいよー」

俺は湯船から出ると足を拭く用のバスタオルが置いている場所の上まで移動する。

「じゃあ両手横にして」

俺は言われるがままに手を水平にあげる。七瀬ユノは用意したバスタオルで俺の身体を丁寧に拭いていく。

「結構身体がつしりしてるよね。なんかスポーツやってたの？」

七瀬ユノは身体を拭きながらそう問うてくる。

「小学の頃は水泳で中学の頃は卓球だよ」

「卓球か、つぽいね」

俺のこと卓球部に入ってそうな顔って感じで馬鹿にしてる？俺のこと「運動部に入っておきたいけど野球部とかサッカー部は嫌だし卓球なら屋内で良さそう」って理由で決めてそうって思ってる？

「でも水泳部は納得かも、体つきがっしりしてるし」

水泳やっててよかったーって思うわけですよ。

「身長は？」

「178」

「そんだけ高いと結構モテたでしょ？」

「そうでもないんだなあこれが」

なんなら彼女もいたこと無し。

「知ってる」

おい。じゃあなんで聞いたんだよ。この子失礼すぎませんか？

「ほい、全部拭けたよー」

気がつけば俺の身体についていた水滴はすべて拭き取られていた。

「じゃあベッド行こ？」

俺は七瀬ユノに手を引かれてベッドへと移動する。

「三回戦までするんでしょ、早速始めよ？」

そう言ってユノは顔を近づけてきた。数秒だけ見つめ合った後ユノは目を閉じる。言葉を交わさずとも次に何をすべきかはわかる。俺も目を閉じユノへ顔を近づける。唇同士が触れたらそれが合図だ。口を開き互いの舌が触れ合う。ユノの体温は俺より高く、少しだけ熱

を感じた。互いの唾液が音を立てる。舌尖で絶縁をなぞり、口腔底をなでる。右の舌縁と左の舌縁が擦れる。口蓋を舌尖で撫でる。次に左の舌縁と右の舌縁が擦れる。

いや、マジに気持ちよろしおす。この女キスが上手すぎる。気持ち良すぎて何回もチンピクしてましたよ。チンコビンビンですよ神。数十秒続けていただろうか。最後にユノが俺の舌を咥え吸われた。いわゆるスロートキスというものだ。舌を吸われた瞬間、気持ちよさのあまりイってしまふんじゃないかと思ったが大丈夫だった。

「へへ、どう？キス上手いでしょ？」

「いいんじゃないすか？ええ」

「えゝそう言ってる割にむちゃくちゃおちんちん動いてた気するけど？」

バレテラ！思いつきりバレテラ！

「や、これはおちんちん体操と言ってますね、こうやって素早く動かすことによつ」

俺の言葉は途中で遮られユノは俺の耳元で囁く。

「強がりさんだねゝ。素直じゃない子にはお仕置が必要かなゝ？」

ユノはチンポの亀頭の先に口付けをする。思わず声が出そうになるがなんとか堪える。そのまま亀頭を舐め回す。全身に電流が走ったような衝撃に思わず身体が反応してびくりとなってしまう。呼吸も荒くなっていたと思う。ユノは俺の反応をみてはニマニマしている。こつ、この女ゝゝゝゝゝゝ俺を見て愉しんでやがるツ！捕食者が獲物をいたぶって愉しむように。さながら今の関係は蛇巻きつかれた鳥のようだ。ユノの猛攻は加速する。尿道口に舌尖の先を挿し込み撫でる。そのまま流れで尿道口から陰茎小帯、いわゆる裏筋を舐められていく。そして亀頭頸に沿って舐められる。はつきり言って気が狂いそうだった。

「かわいい」

ユノはそのまま俺のムスコを根本まで咥え込む。口腔内の温かさ、そして亀頭先端が喉に当たっており射精してしまいそうだった。だが、ここであと思ひ出す。サイトを見たときにオプションでごっくん(精液を飲んでもらうこと)はオプション代が追加されてしまう。しかし受付ではオプションをつけるつもりがなかったので払っていない。まずい、このまま

出してしまえば怖い男の人連れ去られちゃう。俺は快感に負けじと必死の別のことを思い浮かべる。ダメだ、快感のことしか頭に浮かばない。だがゆっくりめのストロークなのが幸いしたのかなんとか堪えきれている。しかし、ユノは右手で俺の睾丸を揉みながらフェラをする。こいつ~~~~俺を悪い男に引き渡して伊勢湾に沈めさせるつもりか~~~~
~~~~そうはせん。なんとか別の想像で快感に対抗する。一分ほど経過したところでユノのフェラチオは終わる。

「そろそろ本番しょつか」

ユノは立ち上がりベッドのコンドームが置いてあるかごからゴムを一つ取り出す。

「私のフェラチオ、上手かったでしょ？」

「最高でした、テクやばすぎ」

「でしょー！お兄ちゃんからも褒められてさあ」

「え？」

え？家族間でそういうことしたの？ドン引きして流石に引いた遠野になった。気づけばチンポにゴムを装着されていた。結構キツキツだ。

「最初はどの体位でしたい？」

今まで騎乗位か正常位、たまにバックでしかしてこなかったからなあ…。せっかくの機会だから。

「対面座位で」

「ニツチなとこ行くね〜おけい」

ユノは立ち上がりベッドの上にあるボトル容器をワンプッシュし、中から出てきた液体を膣内に塗り込む。恐らくウエトラのような潤滑剤だろう。ユノは俺の上にまたがり俺のチンポを自身の膣に入るように誘導する。

「私のフェラを耐え切ったお兄さんにはご褒美をあげちゃいます」

耳元でそう囁かれ期待のあまりチンピクしてしまう。ユノが腰を下ろしていく。俺のペニスがゆっくりとユノに飲み込まれていく。ユノの膣内はキスの時と同様、俺より体温が高く温かった。しまりも、程よい圧迫感で、それでいて俺のモノを優しく包み込んでくれている。

「どう？私のナカは？」

「最高です、温かくて締めりもいい」

「正直でよろしい」

対面座位の状態になっているので俺がユノを見上げる形になっている。ユノは俺の口に舌を入れてくる。俺も負けじと舌を絡ませる。このディープキスにも俺のチンポが興奮しビクビクと動いている。

「舌入れるたびビクビクして可愛い」

「可愛くはないんですけど」

「そう？じゃあ動くね」

何が「じゃあ」なのかは全くわからないけどそんなことはどうでもいい。ユノが腰を下に振るたびにチンポが膣壁によつて擦られ快感をもたらす。腰を下ろすたびに俺の太ももとユノの尻肉がぶつかり音を奏でる。その事実にもまた興奮しペニスの感度が上がっていく。ディープキスの追加効果により俺は4ストロークした時点でイキそうになっていた。

「ごめん、もうそろそろイク」

「イク？いつでもいいよ」

互いに呼吸が荒くなりそれが快感の一助となって――。

「イッちゃえ♡イッち…おおっ！」

ユノが驚くのも無理はない。俺はユノの腰を掴み自身のチンポをマンコの奥深くまで

挿し込む。俺の射精し精液はゴムによって行き先を阻まれる。

「私の中でビクビクしてるゝ可愛いゝ。気持ちよかったでしょ？」

「可愛くはないですけど…気持ちよかった」

「ならよかった。私も気持ちよくさせることは好きだからさ」

ああ、きもちくしてくれてありがとう。ごめんなさいなんでもありません。ユノが腰を浮かせることにより隠れていたチンポが姿を現す。チンポの先端には精液が溜まっており風船のように膨らんでいた。

「すごい、いっぱい出たじゃん」

ユノは俺のチンポからゴムを外し片結びをしてゴミ箱に捨てる。そして精液まみれのチンポをティッシュで拭いている。

「いやあ、そんなことないよ」

お世辞でも褒められるのは嬉しいものだ。ユノは俺の耳元に近づき囁く。

「残り2回、頑張ろっか」

「…ウス」

「その前にタバコ吸わせてー」

そう言ってユノは十四ミリのタバコとライターを取り出す。プロフにはタバコ吸わないって書いてあった気がするが、まあ別にいいけど。

「お兄さんはタバコ吸うの？」

「吸わないけど」

「お兄さん絶対似合うと思うんだけどなゝ」

似合う似合わないの問題じゃあないんだよな。普通に粘膜が弱いタイプの人間だからさあ。紙じゃなく電子タバコでもダメだった。

ユノは一服し終えると洗口液で口をゆすぎこちらに戻ってきた。

「じゃ、二回戦始めよっか」

ユノは少し萎えてふにゃふにゃになっている俺のチンポに触れ先ほどと同じように舐め回して俺のペニスを刺激する。俺のチン棒は徐々に血液が集まり一回戦の時と同様にガチガチとなった。ガチガチになった俺のマラをユノは口に咥え込み先ほどと同じようにフェラチオを行っていく。俺の様子を見ていたユノは頃合いを見てフェラをやめ俺の男根にゴムを被せていく。

「次はどの体位でしたい？」

「じゃあ正常位でお願い」

「おっけい」

ユノはウエトラ(仮)を膣内に塗り込み、ベッドに仰向けになって寝ころがる

「穴間違えないでね、童貞くん。尿道プレイはNのだから」

「どどどっ、童貞ちゃうわっ！」

素人童貞です。ただ、確かにマン肉で隠れてしまえば場所もわからない。そもそも体制的に膣穴を見ることが難しいのだよ。男根の挿入に苦戦しているとユノがニマニマしながら隠部を開いてくる。

「やっぱり童貞じゃん」

「や、違ってすね」

金銭を介した性行為しかしたことがなく。まともな恋愛経験を積んでいないのだから童貞と揶揄されても仕方ないだろう。しかし、そんなことはどうでもよくなるくらい目の前の光景に興奮していた。大きく開かれたユノの股にある女性器は、モザイク越しにしか見

ることができなかった綺麗な造形をしており真ん中に位置する膣穴は不規則に閉じたり開いたりを繰り返していた。それは人間の臓器であることを実感させ、グロテスクに思わせて、そしてその事実に興奮した。リョナやグロテスクが好きなのではない。それが生命を感じさせることにより興奮しているのだ。俺のちんこの亀頭の先を膣内の入り口にあてる。

「じゃ、挿入(い)れるね」

「それは彼氏が悪いなってやつ？」

こらっ。雰囲気ぶち壊しじゃないか。俺は腰に力を入れてゆっくりと俺のモノをユノに入れていく。ゆっくりと挿入し根元までずっぽりと入る。

「~~~~ッ、お兄さんのおちんちん奥まで入ってるよ」

「痛くない？」

「大丈夫」

俺とユノは数秒の間見つめ合い、唇を重ね合わせそのままディープキスをする。

「じゃあ、動くね」

1回射精したとはいえ、挿入(い)れただけでイキそうになっている。恐らく十ストロークもすればそのまま果ててしまうだろう。ゆっくりと中間まで引き抜き再び奥まで入れる。

「あん♡」

ユノは俺が根元まで入れたと同時に可愛いらしい喘ぎ声をあげる。しかし騙されてはいけない。性行為中の女性の喘ぎ声は演技だと。そこを理解していない男どもは自分はテクニクがあるのだと勘違いをし、調子に乗ってしまうのだ。男諸君、驕るな。慎ましやかに生きよ。だが、せっかく喘いでくれているのだ。そこはノってやらねばあるまいて。

「喘ぎ声可愛いね」

「こうするとお客さん喜んでくれるからね」



やっぱり演技じゃないか。そう思いつつもすぐにイかないようにゆっくりと腰を振り、舌を絡め合う。

「お兄さんって優しいよね」

「どしたの急に？」

ディープキスをしながら会話したためうまく聞き取れなかったが恐らくこんな感じのことを言っていただろう。離れた唇から唾液の糸が引く。

「他の人だとさ、「オラオラー気持ちいいかー」って感じでガンガン突いてくるんだけど普通に痛いんだよね」

「お、おう」

急に他の客の愚痴が始まって困惑する。

「けどお兄さんは優しくゆっくりと動いてくれるから好き」

「早漏だからね、激しくしちゃうとすぐイっちゃうのよ」

それと臆病なだけ。嫌われたくないから、控えめな動きをする。

「じゃあ雑魚チンポさんなわけだ♡」

「うるさいですよ？」

俺はユノの口を塞ぐようにキスをする。ユノも応えるかのように舌を絡ませてくる。

「ごめん、もうイキそう」

十ストロークしたところでチンポが射精したがっていた。

「雑魚チンポ♡イっていいよ♡」

「その呼び方や…イクッ！」

会話の途中で射精してしまいチンコが膣内でビクビクと動く。ユノは俺の首と腰にそれぞれ両手と両足を回す。俺の腰はユノの足によって力強く締め付けられている。

「あの、痛いんですけど」

「でも好きでしょ？だいしゅきホールド」

確かに好きだよ？女の子が男の精液を一滴残らず搾り取るぞという意志の現れ。男の遺伝子を体内に取り込むぞという意志の現れ。凄くエロくて最高だと思う。でもね。

「今ゴム付けてるんだよなあ…」

「余計なことを言わない」

ユノは俺の口に舌を入れてきたので俺も舌を絡ませる。最後に舌を吸われユノは話を続ける。

「で？好きでしょ？だいしゅきホールド」

「はい、好きです」

「よろしい」

俺はチンポをユノの女性器から引き抜く。ゴムの先端には先ほどの正常位で射精した際の精液が溜まっている。

「すごい！二回戦目なのに結構出てるじゃん！」

「いやあ、そうでもないっすよ(照)」

ユノは一回戦の時と同じように俺のチンポからゴムを外し片結びにしてゴミ箱に捨てる。そして俺のチンポをティッシュで拭く。

「タバコ吸うねー」

「ウ、ウツス」

ユノは俺の隣に座りタバコを吸う。

「正直さあ、早漏と遅漏どっちがいい？」

「私は早漏かな。さっさと客とのプレイ終わらせたいもん」

この子さっきからズバズバ言いすぎてない？俺もその客なんだけど？大丈夫？他の人の前でも同じこと言って怒られてない？

「それにさ、イかせてあげられなかったら私が気持ちよくさせてあげられなかったのかなって思って悔しくなるの」

「おお」

性風俗に従事している者の矜持というやつだろうか。今時の子に関しては珍しい。

「だからさあ、早漏で生まれたことに感謝しなよ」

ユノはタバコを吸いながらそう吐き捨てる。お説教ですか？普通ならプレイ後におっさんが風俗嬢に対して説教するのが一般的だと思っただけ逆にですか？まあいいけど。

たしかに、他の人のソープレポを読んでも「遅漏でイけなかった」って人を結構な確率で見かける。そう考えると時間内にイクことができる早漏でよかったのかもしれない。いやよかった！遅漏じゃなくて！いやよかった！お金払っても時間内に射精できずに終わるという惨めな状態にならずに済んで！

「んじゃ、三回戦しますか！」

ユノは少し萎えた俺のチンポを口に咥えてしゃぶっていく。さすがに二回も射精しているんで亀頭も鈍感になってきている。はじめにフェラされた頃よりは余裕が出てきた。

そういえば、一回目のフェラをされた時から思っていたことがある。ユノの頭皮からだろうか？シャンプーなのかどうかはわからないが独特な匂いがする。少なくとも甘い香

りではない。俺は気になってユノの頭に顔を近づける。やはりわからない。香水でこんな香りのものが販売しているのだろうか。そう思っているとユノはフェラチオをやめ俺のチンポにゴムを付けていった。

「次はどの体位でする？」

「じゃあバックで」

「いいの？頭の匂い嗅げないけど」

「バレてた？」

「そりゃバレるよ。そういう性癖なの？」

「いや、独特の匂いがすんなって思ってた」

「昨日寝落ちして風呂入れてないからね」

「風呂キャン△？」

「毎日入ってるからね、昨日はたまたま入らなかっただけで」

「お、おう」

「それにさあ！ここで毎回身体洗ってるから実質風呂入ってるようなもんでしょ！」

「お、おう」

流石に引いた遠野になった。ユノはベッドで四つん這いになりこちらにお尻を向ける。ユノのアナルは少し黒ずんでいたものの綺麗な形をしていた。俺はチンポの先端をユノの手によって誘導してもらいながら膣穴に挿入する。体位が変わりお尻のせいか根元までは入れることができなかった。俺はゆっくりと腰を前後に動かす。うん、大丈夫そうだ。先ほどより感度が落ちているため長期戦に対応できる。

「あん♡あん♡あん♡」

ユノのわざとらしい喘ぎ声はまるでコピーペーストしたかのように同じ声を繰り返される。しかもタイミングは腰を打ちつけたタイミングではない。まったく関係ない位置で喘いでいるのだ。俺がわざと途中で腰を止めたらどうなるんだろうか？などと思いながら優しく腰を振る。しかしまあバックから見える光景も好きなんだよな。透き通るような綺麗な肌の背中。その背中に凸凹とした背骨の形が浮き出ている。背中のフォルムも胸からお腹の部分になるにつれて細くなっていく。逆にお腹から腰にかけて広がっている。いわゆるボンキュボンというやつだ。スレンダー体型だとしてもその女性性には興奮せざるおえない。1分ほどバックで腰を動かしていただろうか。少し疲れてきた。早漏の悪いところである。すぐにイってしまうのでそこまで腰を振る機会がないので体力がないのだ。いや、体力がないのは俺だけかもしれない。

「体位変える？」

ユノは俺がイけないことに気がついたのか別の体位を提案してくる。

「じゃあ、寝バックで」

「おっけい、そのまま抜かないでね」

ユノはチンポを膣穴に入れたまま腰を下ろしていく。このままだと俺のチンポも抜けてしまうのでユノを真似るように腰を下ろしていく。ユノが下腹部を完全にベッドにつけて上半身も完全にベッドへとつけうつ伏せの体勢になる。

「覆い被さっていいよ」

大丈夫か？潰れないか？と思いつつもユノに覆い被さる。

「大丈夫？」

「何が？」

「苦しくないかなって」

「大丈夫だよ、もっと重たい人もいたから」

過酷なお仕事なんだな…労災とか降りるのかしら。などと思いながら腰を振ってみる。

「おお」

さつきよりも腰が振りやすい。

「床オナしてる人は一番動きやすい体位なんだって」

「はえ」

俺はリズムよく腰を振りユノはそれに合わせてリズムよく喘ぐ。両手が空いていて手持ち無沙汰だったのでそれぞれの両の手でユノ両手をそれぞれ持つ。左手は上手く手を繋ぐことができたが右手は思いつきり手首を掴んでしまいリスカ痕に触れてしまった。あ、まずい。殺される。まいっか。気分が高まって思わず触れてしまったって言うて謝ろう。腰を一生懸命振っているとバックの時とは違い射精したくなってきた。

「ごめん、もうそろそろイキそう」

「うん、イっていいよ」

俺の腰を振るスピードが速くなる。自身の中の本能が射精したがっている。快感を求め腰を動かす。

「いつ、クっ!」

俺は腰をユノの尻に力強く押し付ける。今までは紳士的な行動を心掛けていたがこの瞬間だけは理性が負けてしまう。俺のチンポはユノの膣内でビクビクと動き射精する。

「気持ちよかった？」

「最高でした…」

ユノはタイマーを見て少しの間考える。

「もう一回戦する？」

「できるなら」

「おっけい、じゃあすぐ始めよっか」

ユノはすぐさま体勢を変え俺のチンポを抜きゴムを外して捨てる。そして新品のゴムを袋から開け俺のチンポに被せる。射精後もあつてか少しふにゃチンになっていたがまたすぐ元気になるだろう。

「騎乗位でいいよね？」

「うん」

俺は仰向けになって寝そべる。ユノは俺の腰に跨る。自分のマンコに俺のチンポの先端を入れゆつくりと体重をかけていく。俺のチンポはユノのマンコによって完全に捕食された。

「じゃ、動くね」

「それは彼氏が悪いねってやつ？」

「うっさい」

ええ。俺がユノに言われた時はスルーしたのに、俺は怒られるんですか？まあいいや。ユノは足の裏を地面につけ屈伸の体勢になる。その状態から腰を動かしていく。いわゆる杭打ち騎乗位というやつだ。お互いの肉がぶつかり合いいやらしい音を立てていく

「騎乗位は確かに疲れるけど筋トレにもなるし主導権が握れるから乱暴なプレイにはならないし良いところもあるんだよね」

ユノはそう言いながら腰を動かす。俺の腹部に手を置きバランスが崩れないようにしている。

「気持ちいい？」

「すごく気持ちいです」

「よかった」

しばらく騎乗位を続けているとユノが動きを止める。

「つかれた」

「あらら」

性行為はコミュニケーションでもあると同時にスポーツでもあるんだよな。

「じゃあ今度は俺に覆い被さってみてよ」

「ん？こう？」

ユノの胸や腹が俺の胴体に密接に触れる。ユノの体温が感じられる。

「おけ」

俺は膝を曲げ両手でユノの尻を掴む。そのまま腰を上下に動かす。下から突き上げる  
といった感じだ。

「いいねえ。お兄さんには頑張ってもらいましょう」

ユノは俺の正面に顔を持ってくる。

「そんな頑張ってる子にはご褒美をあげちゃいます」

ユノは俺の口に舌を入れて口腔内を掻き乱す。俺も負けじと舌で舌を擦り付ける。

「これずっとやってません？」

「やんなくていいの？」

「いいや、ずっとしてたいですね」



ディープキスをしながらの会話なため半ば正常に発音できていないがちゃんと意図は伝わっている。キスをしていると必然的に口が塞がっているため鼻で呼吸する。互いの鼻息が荒くなり顔に拭きかかる。その事実にも興奮する。これを二分の間ずっと繰り返していた。

「だめそう？」

「さすがに四回戦目だからね」

「と言っても他に体位あるかな」

「あ、じゃあ松葉崩しってやつやってみたい」

「松葉崩しってどんなの？」

「ちょっと横向きになって寝てみて？」

ユノは俺の上から動きベッドの上で側面を向いて寝転がる。

「こう？」

「そう。んでその状態で片足あげてみて？」

ユノは言われるがままに右足を上げる。俺はユノの右足を持ち自分の左肩に掛けられるように調節する。

「これが松葉崩しね」

「これ側位じゃない？」

俺もうろ覚えだから思い出せない。たしかこんな感じだった気がする。

「そうなの？とりあえずこれでシてみたい」

「いいよ」

ユノの了承は得た。俺は片方の手でユノの手を握り、そしてゆっくりとチンポをユノの性器に挿入していく。根元まですっぽりと入る。

「じゃあ、動くよ」

俺は腰を前後に動かす。ユノも俺の腰のリズムに合わせて喘ぐ。特にこれと言って変化はなかった。かのように思えた。三十秒ぐらいしたころだろうか、ユノの膣内が明らかに滑りが良くなったのだ。それと同時にユノの喘ぎ声も変化していた。先ほどまではわざとらしい感じの「あん♡」だったが「あっ」や「いっ」や「ダメっ」に変わっていたのだ。ユノは感じているのだ。松葉崩しに変えたことにより奥まで刺激され感じているのだ。膣内の滑りがウエトラの時とは段違いによくなったのは愛液が出ているからなのだろう。かわいところもあるじゃんか。少し前の余裕はどうしたんだと。理解(わか)らせてやってやつしたくなつたよ。俺は乱暴にはならないように調節しつつも腰を振るペースを早める。ユノの喘ぎ声も大きくなる。かわいいなあおい。俺はそのままの腰を振るペースを維持する。しかし問題はこちらもイキそうという点だ。ユノが感じていなかったらさっさと射精して終わらせるべきだろうがユノが感じているのであればイかせてあげたい。これは自己満足で、そして男の意地だ。ユノがイけるまで俺は射精を我慢する。だが、我慢する必要は無くなった。

「イックっ！」

俺の手を握っていたユノの手が強く握りしめてくる。それと同時にユノの膣がおれのチンポを締め上げる。

「イクっ！」

ユノの膣の締め付けに耐えきれず射精してしまう。しばらくの間、言葉はなく、互いの荒い呼吸だけがプレイルームに響いていた。

「…久しぶりにセックスでイけたかも」

「マジ？」

「大マジ」

突如としてタイマーが鳴り響く。どうやら時間のようだ。

「身体洗おっか」

「ウス」

俺たちはバスルームに移る。ユノがシャワーの温度を確かめそして俺の身体を流していく。

「ねえ、次も私のこと指名してよ。私ら相性いいと思うんだよね」

「そうかなあ」

「そうだよ。四回戦もさせてくれる子って他にいないでしょ？」

まあ確かにね、入れて数秒で射精したあとはずっとトークで潰してきた子とか二回戦まではさせてくれたけど三回戦まではさせてくれなかった子とか色々いたけど四回戦までさせてくれた子はユノがはじめてだ。

「それにさ、身体の相性もそうだしお兄さんと一緒にいると気が楽なんだよね。ありのままですられるというか本音で語り合えるというか」

そうかしら？俺あんまり本音で語ってなかったような気がするけども。

「フェラも凄かったでしょ？それに色んな体位でさせてくれる子なんて他にいないよ」

正直にいうとユノよりフェラが上手い子は何人かいた。だが、その子達が色んな体位でさせてくれるのか言われればそれはノーだ。この子より突出した物を持つてる子は今までにいたし俺が相手にしていない子でもいるのだろう。だが、総合的に判断するとユノが一番かな。そして新しくこの子よりいい子を探し当てるとなると一苦労だ。

「わかった。次も指名するよ」

「やた、次はいつ来る？明日？」

「いや無理だけど」

「なんで？」

「金ねんだわ」

「え」

「次の給料日お金入るから、それまで待つて」

「ふふ、はい」

そんな会話をしつつシャワーを浴び終えタオルで身体を拭き服を着る。ユノも初めに着ていたパンツスタイルのスーツへと着替えていく。

「準備おっけ？」

「ああ、いいよ」

ユノは部屋の壁際にかけてある受話器を取り数秒後に話し出す。

「お客様お帰りです」

ボーイに向けての連絡だ。他の風俗では知らないがソープでは他の客同士が鉢合わせないようにこうやってボーイと連絡をとり調整するのだ。

「じゃ、行こっか。忘れ物ないようにね」

俺は靴を履き最後に室内を見渡し忘れ物がないかを確認する。廊下を歩き階段の前で立ち止まる。

「今日はありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそありがとうございました」

「また来てね♡」

「ああ、次も来るよ」

俺たちはそのままハグをする。その時、ユノは耳元でこう囁いた。

「他の女のところへ行ったら、殺すから」

一瞬、心臓が握り潰されたかと思えた。皮膚の細胞が瞬時に氷漬けされたかのように寒気を感じた。視神経が焼き切れ視界がブラックアウトしたかと思えた。

その後の俺はちゃんと平常心でいられただろうか。いや、平常心を保っているように演じきっていただろうか。ハグを終え最後にフレンチキスをして階段を降りていく。俺の感覚ではグラグラ揺れていたのだがまともに階段を降りていられただろうか。階段を降りて二階へと目を向けるとユノがこちらを見ていたので笑顔で手を振った。その笑顔は、引き攣らずに、自然体の笑顔を出せていただろうか。一階の受付でボーイがありがとうございましたと言ったのだろうかうまく聞き取れなかった。俺もありがとうございましたと返す。自動ドアの扉が開き外へ出る。

ひい~~~~~ん怖かったよお~~~~  
なあ……。正直このまま関係続けるのは危険だと思うんだよなあ、でも殺されるのは嫌だよ  
お~~~~(泣)。まあ、今までで一番よかった子だったから次もちゃんと指名しますかね。

完